

「ユスティニアヌスのペスト」をめぐる議論 ～「最大化主義者」対「修正主義者」？～

小林 功

1 はじめに

エジプトの地中海沿岸部にある港町、ペルシオンを疫病が襲ったのは、ユスティニアヌス1世（在位527-565年）がローマ帝国の皇帝だった時期の中盤、541年夏のことであった。この病は当時エジプト最大の都市であったアレクサンドリア、そしてエジプトの他地域に拡大した。またペルシオンから北上して、パレスティナ地方にも波及していった¹⁾。

翌542年の春には、ローマ帝国の首都コンスタンティノープルにまで感染が拡大した。この時コンスタンティノープルにいて感染拡大の目撃者となった歴史家プロコピオスは、以下のように感染の規模を証言している。

この病はビュザンティオン（コンスタンティノープル）では4ヶ月間猛威を振るったが、特にひどかったのは3ヶ月間であった。最初のうちは、死者は通常よりもわずかに多い程度だったがすぐに悪化して死者数が毎日5,000人に達し、さらに10,000人、そしてさらにそれ以上になった。²⁾

疫病はさらに西に進み、ブリテン諸島にまで波及した³⁾。またパレスティナ地域から東にも感染の波は及び、ササン朝ペルシアにも拡大している⁴⁾。

これが、「ユスティニアヌスのペスト／ユスティニアヌスの疫病（Plague of Justinian）」と呼ばれるパンデミックの第1波である。541年から始まった第1波の感染拡大は数年で沈静化するものの、550年代末から第2波の流行がはじまる。そしてこれ以降、7世紀初頭までは約15年の間隔で流行した⁵⁾。6世紀中盤～後半の歴史家エヴァグリオスは、第1インデイクチオ、あるいは第2

1) Procopius, *De bellis*, 2.22.6.

2) Procopius, *De bellis*, 2.23.1.

3) M. Keller et al., "Ancient *Yersinia pestis* genomes from across Western Europe reveal early diversification during the First Pandemic (541-750)", *Proceedings of the National Academy of Sciences* 116-25 (2019), pp. 12363-12372. (<https://www.pnas.org/doi/full/10.1073/pnas.1820447116>)

4) Pseudo-Dionysius of Tel-Mahre, W. Witakowski (tr.), *Chronicle Part III*, Liverpool: Liverpool University Press, 1996 (以下、DTMと略), p. 102; J. -B. Chabot (tr.), *Chronique de Michel le Syrien, Patriarche Jacobite d'Antioche (1166-1199) II*, Paris, 1901 (以下、Michel le Syrienと略), p. 240; G. Greatrex (ed.), R. R. Phenix & C. B. Horn (tr.), *The Chronicle of Pseudo-Zachariah Rhetor: Church and War in Late Antiquity*, Liverpool: Liverpool University Press, 2011, pp. 414-415.

5) D. Stathakopoulos, "Crime and Punishment: The Plague in the Byzantine Empire, 541-749", in: L. K. Little (ed.), *Plague and the End of Antiquity: The Pandemic of 541-750*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007, pp. 99-118, p. 105.

インディクチオごとに流行が発生したと述べている⁶⁾。7世紀以降も流行は断続的に発生し、スタコプロスによると8世紀なかばまで合計18回の流行の波が確認できるという⁷⁾。

この疫病の原因は、感染拡大の経験者であるプロコピオス、そしてエフェソスのヨハネス⁸⁾らの証言から知られる症状を根拠として、14世紀中盤以降に大きな被害をもたらした「黒死病」⁹⁾と同様、ペスト菌 (*Yersinia Pestis*) によるものと推定されてきた。そのため「黒死病」及び19世紀末にはじまった流行とともに、ペスト菌による3回のパンデミックの1回目とされることが多い。そして近年の分子遺伝学の急速な進歩によって、発掘された人骨からペスト菌のDNAの抽出に成功しており、「ユスティニアヌスのペスト」の原因が(18回あったとされる流行の波の少なくとも何回かは)ペスト菌であることが明確となっている。

ペスト菌は仮性結核菌 (*Yersinia Pseudotuberculosis*) から変異して誕生した、歴史の新しい¹⁰⁾細菌である。仮性結核菌から分岐してからも変異は続き、約5,000年前までにはネズミなどのげっ歯類を宿主として感染拡大する性質¹¹⁾などを獲得していた¹²⁾。そしてラトヴィアで発見された約5,000年前の人骨やスウェーデンで発見された約4,900年前の人骨からペスト菌が検出されていることなどから、ペストがすでに新石器時代にはヨーロッパで流行していた可能性が指摘されるようになってきている¹³⁾。また6世紀からの「ユスティニアヌスのペスト」以前にローマ帝国でペストが流行していた可能性も指摘されており¹⁴⁾、「ユスティニアヌスのペスト」が実際にペストの1回目のパンデミックなのかは不分明となっている。

「ユスティニアヌスのペスト」を引き起こしたペスト菌は、「黒死病」や19世紀からのパンデミックを引き起こしたペスト菌とは株が異なり、現在まで存続していない¹⁵⁾。また「ユスティ

6) Evagrius Scholasticus, *Historia ecclesiastica*, IV-29. インディクチオは、15年を1周期とするローマ～ビザンツ帝国の会計年度。

7) D. Stathakopoulos, “La peste de Justinien (541-750): questions médicales et la réponse sociale”, *Cahiers du GRHIS* 16 (2005), pp. 31-48.

8) ペストの流行の第1波に関するエフェソスのヨハネスの報告は、シリアのミカエルヤテル・マーレの偽ディオニュシオスらによる、後代のシリア語年代記での引用によって現在に知られている。Michel le Syrien, pp. 235-240: DTM, pp. 74-98.

9) cf. M. H. Green, “The Four Black Deaths”, *The American Historical Review* 125-5 (2020), pp. 1601-1631.

10) 最近の研究によると、仮性結核菌からの分岐は約7,350年前。J. Susat et al., “A 5,000-year-old hunter-gatherer already plagued by *Yersinia pestis*”, *Cell Reports* 35 (2021), 109278. (<https://doi.org/10.1016/j.celrep.2021.109278>)

11) 現在のペストの基本的症状や感染メカニズムについては、国立感染症研究所のウェブページで簡潔に解説されている。(<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/514-plague.html>) (最終閲覧日: 2022年11月22日)

12) Ch. E. Demeure et al., “*Yersinia pestis* and plague: an updated view on evolution, virulence determinants, immune subversion, vaccination, and diagnostics”, *Genes & Immunity* 20 (2019), pp. 357-370. (<https://doi.org/10.1038/s41435-019-0065-0>); A. Andrades Valtueña et al., “Stone Age *Yersinia pestis* genomes shed light on the early evolution, diversity, and ecology of plague”, *Proceedings of the National Academy of Sciences* 119-17 (2022), e2116722119. (<https://doi.org/10.1073/pnas.2116722119>)

13) J. Susat et al., op. cit.; N. Rascovan et al., “Emergence and Spread of Basal Lineages of *Yersinia pestis* during the Neolithic Decline”, *Cell* 176 (2019), pp. 295-305. (<https://doi.org/10.1016/j.cell.2018.11.005>).

14) J. Mulhall, “Plague before the Pandemics: The Greek Medical Evidence for Bubonic Plague before the Sixth Century”, *Bulletin of the History of Medicine* 93-2 (2019), pp. 151-179.

15) D. M. Wagner et al., “*Yersinia pestis* and the Plague of Justinian 541-543 AD: a genomic analysis”, *The Lancet Infectious Diseases* 14-4 (2014), pp. 319-326 (以下、Wagner et al. (2014) と略), p. 319. ([https://doi.org/10.1016/S1473-3099\(13\)70323-2](https://doi.org/10.1016/S1473-3099(13)70323-2))

ニアヌスのペスト」の発生源は、「ユスティニアヌスのペスト」を引き起こした株を含む生物型 (biovar) の生息が中央アジアの天山山脈周辺で現在でも確認できる¹⁶⁾ことから、中央アジアからインド洋・紅海を経て紅海北部の港町クリスマに伝わり、そこから近隣のペルシオンに感染拡大したと想定されている¹⁷⁾。

「ユスティニアヌスのペスト」は、プロコピオスらの報告が非常に印象的なこともあり、古くから研究者の関心をひきつけていたが、特に近年議論が盛んになってきている。その背景としては1980年代以降さまざまな感染症の流行が続くようになり、パンデミックが社会に与える影響についての関心が強くなったこと¹⁸⁾や、上述したような分子遺伝学の急速な進歩などが挙げられる。

近年の研究において特に論点となっているのは、「ユスティニアヌスのペスト」が社会に与えた影響である。なぜなら、プロコピオスらの記述から想定できる大きな被害 (特に人口減少) がローマ帝国を含む地中海・中近東地域や西欧の社会に大きな影響を与え、それが7世紀のイスラームの登場などの大きな変化に結びついていった、という想定が可能になるからである。しかしながらこのような想定に関しては批判もあり、現在でも議論が決着していない状況にある。

そこで本稿では「ユスティニアヌスのペスト」が6世紀中盤及びそれ以降地中海・中近東地域や西欧に与えた影響に関して、現在の議論の出発点となっている1980年代以降を中心に、現在までの研究動向を紹介・整理していく。なお、本稿では第18波までであったとされる「ユスティニアヌスのペスト」の流行のうち、541年からの第1波の流行に主に着目しつつ概観していく。これは、第1波に関する分析が最も多く、「ユスティニアヌスのペスト」のもたらした影響に関する研究動向を十分に把握できるからである。

2 デュリアの見解をめぐる論争

「ユスティニアヌスのペスト」に関する研究は、1980年代まではプロコピオスやエフェソスのヨハネスらによる同時代の歴史記述に依拠してすすめられていた¹⁹⁾。そのため、上述したような1日に10,000人以上がコンスタンティノーブルで犠牲となったというプロコピオスの記述、あるいは1日に16,000人がコンスタンティノーブルで犠牲になり²⁰⁾、エジプトとの境に近いパレスティナ

16) 「ユスティニアヌスのペスト」を引き起こした株 (0.ANT4) と非常に近い関係にある株 (0.ANT5) が、同じく天山山脈周辺に生息していることも最近発見された。G. A. Eroshenko et al., “*Yersinia pestis* strains of ancient phylogenetic branch 0.ANT are widely spread in the high-mountain plague foci of Kyrgyzstan”, *PLOS ONE* 12-10 (2017), e0187230. (<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0187230>). cf. Ch. E. Demeure et al., op. cit., p. 359.

17) C. Tsiamis, *Plague in Byzantine Times: A Medico-historical Study*, Berlin: De Gruyter, 2023 (以下、Tsiamis (2023) と略), pp. 141-147; M. Keller et al., op. cit., p. 12368. cf. ヨハネス・プライザー=カペラー (小澤実訳) 「微生物学からみたグローバルゼーション: 二世紀から八世紀の疫病と帝国の絡み合い」『史苑』81-1、2021年、101-116頁、106頁。

18) cf. M. Eisenberg, “Blog: Why do we think ancient pandemics changed the world?”, *Society for Classical Studies*, May 28, 2021. (<https://classicalstudies.org/scs-blog/merle-eisenberg/blog-why-do-we-think-ancient-pandemics-changed-world>) (最終閲覧日: 2022年11月19日)

19) 20世紀における研究状況については、スタサコプロスがまとめている。D. Stathakopoulos, “The Justinianic plague revisited”, *Byzantine and Modern Greek Studies* 24 (2000), pp. 256-276 (以下、Stathakopoulos (2000) と略)。

20) DTM, p. 86.

のある都市では7人の大人と1人の少年しか生き残らなかった²¹⁾といったエフェソスのヨハネスの記述に依拠し、540年代以降に広範な地域²²⁾で大量かつ急速な人口減少が生じたこと、そして7世紀以降のヨーロッパ・地中海世界・中近東地域の大きな社会の変化の主要な背景となったことが広く受け入れられていた。例えばラッセルは「ユスティニアヌスのペスト」の結果、それ以降の中世、そして今日まで続く新しい人口・社会のパターンが6-7世紀に形成されたと論じている²³⁾。またル=ゴフとピラベンも、「ユスティニアヌス帝時代のペストは、おそらくムハンマド（によるイスラームの誕生）を説明することができ、その後のシャルルマーニュのこともまた説明することができるのだと主張できるだろう（下村武訳）」²⁴⁾と述べている。

このような研究動向に大きな見直しを迫ったのが1989年のデュリアの論考²⁵⁾である。デュリアは従来の研究がほとんど使用してこなかった墓碑を中心とする碑文、貨幣、エジプトのパピルス文書、法律、そして発掘成果などを参照しつつ、「ユスティニアヌスのペスト」のもたらしたダメージについて検討をおこなった。

デュリアは碑文に関して、ペストへの言及がきわめて乏しく、墓碑からも流行を看取することができないこと、そして墓碑の数から540年代の死者数が前後の時期と比較してあまり変化していない可能性を指摘した²⁶⁾。デュリアはパピルス文書からも、アンタイオポリスという都市でペストの流行の前後で税額に変化が見られないことなどを指摘して、ペストの及ぼした影響の大きさに疑念を呈している²⁷⁾。貨幣に関しては、デュリアはペストが貨幣の発行や流通に何らかの影響を与えた可能性は否定しないものの、この時期の貨幣流通状況に起きた変化（アンティオキアなどで生じた貨幣発行の中断など）はペスト以外の要因で説明が可能であるとする²⁸⁾。

またデュリアは発掘成果から都市部の人口減少が確認できるわけではなく、むしろ貧民の増加が示唆されるとする。そして農村部においても6世紀中盤以降に顕著な人口減少を示唆する証拠は得られていないと、チャレンコらの調査結果²⁹⁾に依拠しつつ主張した³⁰⁾。デュリアは法律に関して、ペストに関連する立法が非常に限定されていたと考える³¹⁾。

21) DTM, pp. 77-78.

22) エフェソスのヨハネスは、ペストの流行がガリアやイベリア半島にまで及んだと報告する。Michel le Syrien, pp. 235-236. なおフランスやスペインからは実際に、ペスト菌に感染した人骨が確認されている。M. Keller et al., op. cit.

23) J. C. Russell, "That Earlier Plague", *Demography* 5-1 (1968), pp. 174-184.

24) ジャック・ル=ゴフ&ジャン=ノエル・ピラベン（下村武訳）「中世初期のペスト」E・ル=ロワ=ラデュリ/A・ビュルギエール監修、E・ル=ロワ=ラデュリ編（浜名優美監訳）『叢書『アナール1929-2010』歴史の対象と方法IV 1969-1979』藤原書店、2015年、43-75頁、75頁。（原論文はJ. Le Goff & J. -N. Biraben, "La peste dans de Haut Moyen Âge", *Annales* 24-6 (1969), pp. 1484-1510.）

25) J. Durliat, "La peste du VI^e siècle. Pour un nouvel examen des sources byzantines", in: G. Dagron (ed.), *hommes et richesses dans l'Empire byzantine I: IV^e - VII^e siècle*, Paris: P. Lethielleux, 1989, pp. 107-119（以下、Durliat (1989) と略）。

26) Durliat (1989), pp. 108-109.

27) Durliat (1989), pp. 109-110.

28) Durliat (1989), pp. 110-111.

29) チャレンコの調査については渡辺金一『中世ローマ帝国—世界史を見直す—』岩波新書、1980年、143-234頁参照。

30) Durliat (1989), pp. 111-112.

31) Durliat (1989), p. 112.

次にデュリアは文献史料でのペストに関する描写について検討する。デュリアが大きく取りあげるのは歴代ローマ教皇の伝記から構成される『教皇の書』において、ペストに関する記述がきわめて少ない点である。デュリアが顕著な事例として挙げるのは、トゥールのグレゴリウスがペストで没したと述べている³²⁾ 教皇ペラギウス2世（在位 579-590年）について、『教皇の書』がまったくペストに触れていない³³⁾ ことである。また聖人伝でもペストに関するまとまった記述のあるものがほとんど看取できないことから、ペストが人びとの主要な関心事ではなかったと主張する。そしてデュリアはペストに関する史料の言及のしかたや用語の検討などを通じて、ペストの被害に関する誇張されたステレオタイプな描写が再生産され、トポスと化してしまった可能性を指摘した³⁴⁾。

デュリアは、「ユスティニアヌスのペスト」がローマ帝国の広い地域で流行し、コンスタンティノーブルなどを中心として大きな被害が出た都市があったことなど、一定の被害をもたらしたことは認める。しかしその一方で、コンスタンティノーブルの事例を帝国全域の都市に一般化することはできず、ペストが主に感染し、被害が拡大したのは都市部、そして主要な交通路沿いであって、そのようなルートから外れた村落部では被害はさほど大きくならなかったと論じる³⁵⁾。

そしてこのような分析結果を踏まえてデュリアは、「ユスティニアヌスのペスト」に関する主要な文字史料は実際の被害に比べて過大な報告をおこなっており³⁶⁾、「ユスティニアヌスのペスト」によってローマ帝国や地中海世界において大規模な人口減少が起きていたとは言いがたいと結論づけたのである。

デュリアの研究は、プロコピオスらの歴史記述にほぼ依拠していた従来の研究手法に大きな見直しを迫るものとなった³⁷⁾。デュリアの研究以降、「ユスティニアヌスのペスト」に関する研究は（どのような主張をおこなうのかに関わらず）さまざまな史料を幅広く参照しながら検討していくことが不可欠かつ一般的となった。この点だけでもデュリアの研究のもたらした意義は計りしれない。またウィットウやウィッカムの通史的书物では、デュリアの主張に依拠した「ユスティニアヌスのペスト」への評価がおこなわれており、デュリアの研究がある程度受け入れられたことがわかる³⁸⁾。これらの書物、特にウィッカムの書物は大きな反響を呼んだものであるため、「ユスティニアヌスのペスト」の被害を小さく見積もる方向性は、無視できない影響力を持ったといえる。個別研究においても、シリアの状況についてデュリアの方向性に依拠した議論をおこなったフォスの研究³⁹⁾などがある。

しかしながら、デュリアの主張に対する批判・反論もすぐに現われた。デュリアの論考が掲載さ

32) Gregorius Turonensis, *Libri historiarum X*, X.1.

33) L. Duchesne (ed.), *Le Liber Pontificalis I*, Paris, 1981, p. 309.

34) Durliat (1989), pp. 112-116.

35) Durliat (1989), pp. 117-118.

36) Durliat (1989), p. 116.

37) Stathakopoulos (2000), p. 270.

38) M. Whittow, *The Making of Orthodox Byzantium, 600-1025*, Basingstoke: Macmillan Press, 1996, pp. 66-68; Ch. Wickham, *Framing the Early Middle Ages: Europe and Mediterranean, 400-800*, Oxford: Oxford University Press, 2005, pp. 548-549.

39) Cl. Foss, "Syria in Transition, A.D. 550-750: an archaeological approach", *Dumbarton Oaks Papers* 51 (1997), pp. 189-269.

れた論文集の中で、ビラベンがすでに簡単な反論をおこなっている⁴⁰⁾。1990年代に入ってからではコンラドが1994年の論考において、デュリアの主張に対して以下の3点の反論をおこなった。第一に、史料がある病気に言及するか否かは、その史料が生み出された社会の状況と深く関連しており、単にその病気が社会に深刻かつ重要な影響を与えたか否かということだけを反映しているわけではない。第二に、デュリアが分析に関して使用したギリシア語史料、及びエフェソスのヨハネスなど以外にも、コンラドがこの論考で分析したアラビア語の韻文のように様々なものがあり、それらの史料からもペストによる災厄が看取できる。そして第三に、近現代のペストの流行においても、きわめて高い死亡率を出した事例はいくつも知られており、6世紀の証言が誇張であるかは単純には判断できない⁴¹⁾。

またウィットビは1995年に、人の移動という観点からデュリアの議論に若干の批判を加えている⁴²⁾。

デュリアに対して全面的かつ包括的な批判をおこなったのはサリスである⁴³⁾。サリスはデュリアの主張を「修正主義者的傾向 (revisionist tendency)」と断じ⁴⁴⁾、デュリアの挙げた論点に対して個々に徹底的な反論をおこなった。まず墓碑から死亡率の増加が看取できないという主張に対しては、ペストの流行とその繰り返しによって死亡者数が急増し、プロコピオスやエフェソスのヨハネスが報告するように大量の死体を一気に埋葬あるいは投棄した⁴⁵⁾結果、墓碑を作成するような通常の埋葬が不可能あるいは困難だった可能性を指摘する。そしてそのため、残存する墓碑からはペストによる大量死の影響を跡づけることは困難であると論じている⁴⁶⁾。

立法数の減少に関しては、530年代にユスティニアヌスの立法に深く関わったトリボニアヌスの死(542年)、そしてカッパドキアのヨハネスの失脚・追放(541年)の影響が強く、ペストとの関わりを見ることはできないと論じる⁴⁷⁾。

デュリアが、「ユスティニアヌスのペスト」が農村部の人口に大きな影響を与えなかったと論じていることに対して、サリスは貨幣・法律・パピルス文書の分析をおこないつつ厳しい批判を加える。

まず貨幣に関しては、「ユスティニアヌスのペスト」が流行していた時期に貨幣発行が不安定な状態になっていたとサリスは指摘する。その際にサリスが目にするのは、国家財政管理局長 (Comes Sacrarum Largitionum) ペトロス・バルシユメスの行動である。プロコピオスは『秘史』でペトロス・

40) J. -N. Biraben, "La peste du VI^e siècle dans l'Empire Byzantin", in: G. Dagron (ed.), op. cit., pp. 121-125.

41) L. I. Conrad, "Epidemic disease in central Syria in the late sixth century: Some new insights from the verse of Ḥassān ibn Thābit", *Byzantine and Modern Greek Studies* 18 (1994), pp. 12-58.

42) M. Whitby, "Recruitment in Roman Armies from Justinian to Heraclius (ca. 565-615)", in: Av. Cameron (ed.), *The Byzantine and Early Islamic Near East III: States, Resources and Armies*, Princeton: The Darwin Press, 1995, pp. 61-124, pp. 94-95.

43) P. Sarris, "The Justinianic plague: origins and effects", *Continuity and Change* 17-2 (2002), pp. 169-182 (以下、Sarris (2002) と略)。この論文は1994年、1998年、1999年のセミナーでの報告が基礎となっている。また論文名を変更した上で、2007年のリトル編の論文集に再録されている。P. Sarris, "Bubonic Plague in Byzantium: The Evidence of Non-Literary Sources", in: L. K. Little (ed.), op. cit., pp. 119-132.

44) Sarris (2002), p. 173.

45) Procopius, *De bellis*, 2.23.3-13; DTM, pp. 87-93.

46) Sarris (2002), p. 174.

47) Sarris (2002), pp. 174-175.

バルシュメスを何回か批判しているが、サリスによるとこれらは国家の歳出を減らすための努力の一環と見なすことができるという⁴⁸⁾。

そうした批判の中に、ペトロス・バルシュメスが「金貨を慣例通りではなく、小さくして発行することにした」という一節がある⁴⁹⁾。サリスはプロコピオスのこの記述を、ユスティニアヌス1世時代に発行された「軽量ソリドゥス金貨」との関連で着目する。「軽量ソリドゥス金貨」はそれまで、538年に導入されたと考えられていた。だがサリスは、ペトロス・バルシュメスが国家財政管理局長の任にあった542-543年あるいは547-550年にこの金貨が導入されたのであり、ペストの流行による人口の急速な減少と税収の著しい減少という緊急事態に見舞われた国家が、かかる状況に対応するためにおこなった方策であると論じる。また銅貨についても542年以降に重量が不安定になり、より重い重量の銅貨が発行されるようになることを、同様の方策と解している⁵⁰⁾。

国家による立法に関してサリスは、545年6月の新法128⁵¹⁾に注意を喚起する。この法律は放棄された耕作地(agri deserti)に課せられた租税の再割り当てに関して規定する(プロコピオスは激しく批判⁵²⁾)ものであるが、サリスによるとこの法律も農村部における労働力の急減に対応するための方策であった⁵³⁾。またユスティニアヌス1世が545年4月に、オリエンス道長官とコンスタンティノーブル長官に対して発した布告(新法122)からは、農業労働者などに支払われる賃金改善の方向が看取できるという⁵⁴⁾。

このような方向性は、サリスによるとエジプトのパピルス文書からも看取できる。サリスはパピルス文書に関しては、残存している文書が断片的であるためにそこから人口の時間的変化を提示することが困難で、デュリアの主張を支えるものとはならないことを指摘する⁵⁵⁾が、その上でパピルス文書から土地貸借契約が6世紀中盤以降顕著に借地人に有利な条件へと変化していくことが確認できることを指摘する。これは上述した新法122から読み取れる労働者に対する賃金改善の方向性とも対応しており、人口急減の結果として生き残った労働力にとって有利な状況が現出したことを示すものであるという。またパピルス文書から、大所領において労働者の賃金の少なくとも一部が貨幣で支払われていたことがわかることから、6世紀中盤以降明確になる金貨と銅貨の交換比率の変化も、農業・非農業を問わず賃金労働者に対する賃金上昇の圧力が強まったことを示唆すると

48) Sarris (2002), pp. 175-176.

49) Procopius, *Historia Arcana*, 22.38. なおこの箇所(τὸ χρυσοῦν νόμισμα οὐχ ἥπερ εἰώθει ἐκφέρειν ἤξιον, ἀλλ' ἐλασσον αὐτὸ καταστησάμενος)を和田廣訳は「金貨を今までどおりに铸造するのではなく、金保有率を切り下げた」、橋川裕之・村田光司訳は「金貨を慣例どおりに提供すべきとは思わず、その量を減らした」としており、いずれも金貨の金含有率を低くしたと解釈している。ただし後者は「軽量ソリドゥス金貨」の可能性も指摘している。プロコピオス(和田廣訳)『秘史』京都大学学術出版会、2015年、168頁；橋川裕之・村田光司「プロコピオス『秘史』一翻訳と註(3)」『早稲田大学高等研究所紀要』7、2014年、41-70頁、46頁・61-62頁(註479)。

50) Sarris (2002), pp. 176-177.

51) cf. D. J. D. Miller & P. Sarris (tr.), *The Novels of Justinian: A Complete Annotated English Translation Volume 2*, Cambridge: Cambridge University Press, 2018 (以下、*The Novels of Justinian* と略), pp. 845 (n. 1).

52) Procopius, *Historia Arcana*, 23.15-16.

53) Sarris (2002), p. 177.

54) Sarris (2002), pp. 177-178. コンスタンティノーブル長官だけでなくオリエンス道長官(帝国の主要部分を統括)宛であることから、農村部を含む帝国の広い地域への対策が意図されているとサリスは考えている。cf. *The Novels of Justinian*, p. 799 (n. 1).

55) Sarris (2002), p. 174. サリスは、後述するように2022年の論考でも同様の指摘をおこなっている。

サリスは指摘している。賃金労働者など貧しい人びとに対する賃金は銅貨で支払われることが多い一方、商品の価格や租税の税額は金貨で評価されることが普通であったから、銅貨に対する金貨の価値下落は、貧困層に対して有利な状況を引き起こすからである⁵⁶⁾。

このようにサリスは、デュリアに対して詳細に反論をおこない、碑文、貨幣・法律・パピルス文書にデュリアと同様に依拠しつつ、「ユスティニアヌスのペスト」によって急速に人口が減少した結果、都市部でも村落部でも労働力が不足し、税収不足と国家財政の危機が深刻化したと結論づけたのである。

サリス以降もデュリアの議論に対する批判が続いた。2007年にはケネディーがシリアの状況について検討をおこない、タートの新しい調査結果⁵⁷⁾なども援用しつつ、6世紀中盤以降にシリアでは都市部でも農村部でも突如として経済的停滞が生じていて同時代の歴史記述と矛盾しないと論じ、デュリア（ヤフォス）の見解を批判している⁵⁸⁾。

デュリアに対する重要な反論としては、マイヤーの2016年の論考も無視できない⁵⁹⁾。マイヤーはサリスやケネディーの議論に従いつつも、彼らとはいくぶん異なる視点からもデュリアの見解に対する反論をおこなっている。マイヤーの指摘で特に重要なのは、「ユスティニアヌスのペスト」が当時の人びとの心性に与えた長期的な影響である。マイヤーは『柱頭行者小シユメオン伝』に見られる歴史家エヴァグリオスのエピソード⁶⁰⁾（このようなエピソードが聖人伝に書かれていること自体が、デュリアの見解に対する反証になっているともマイヤーは指摘する⁶¹⁾）やエフェソスのヨハネスの報告⁶²⁾などから、ペストの流行の結果キリスト教信仰から離れようとする傾向が出現していたことを指摘する。こうした傾向はペストの流行がくり返された結果、そして540-542年を頂点としてさまざまな災厄が人びとを襲った結果として、大きな不安感人びとの中に形成されていたことを示すものであるとマイヤーは論じる⁶³⁾。このような状況下、文化的そして部分的には宗教的な、ローマ社会の深遠な変革＝「典礼化 (liturgification)」が6世紀後半に進展したとマイヤーは主張した⁶⁴⁾。

このような急速な変化を示す重要な指標として、マイヤーはマリア崇拜の盛行、イコン崇拜の出現、そして皇帝の神聖化を挙げる。431年のエフェソス全地公会議でマリアが「神の母 (テオトコス)」とされるなど、以前からマリア崇拜の道筋は描かれていた。しかしこのような方向性に特に大きな弾みがついたのが6世紀であり、それはペストの流行と関連していたとマイヤーは主張する。542年に主の迎接祭（西方教会のキャンドルマス）の祭日が2月14日から2月2日に変更されたこ

56) Sarris (2002), p. 178.

57) G. Tate, *Les campagnes de la Syrie du Nord du II^e au VII^e siècles I: Un exemple d'expansion démographique et économique à la fin de l'Antiquité*, Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1992.

58) H. N. Kennedy, "Justinianic Plague in Syria and the Archaeological Evidence", in: L. K. Little (ed.), op. cit., pp. 87-95.

59) M. Meier, "The 'Justinianic Plague': the economic consequences of the pandemic in the eastern Roman empire and its cultural and religious effects", *Early Medieval Europe* 24-3 (2016), pp. 267-292 (以下、Meier (2016) と略)。

60) ペストで娘を失ったエヴァグリオスは異教に心を魅かれそうになったが、それを知った小シユメオンの介入によって思いとどまったという。P. van den Ven (ed.), *La vie ancienne de S. Syméon Stylite le jeune (521-592)*, Brussels: Société des Bollandistes, 1962, p. 233.

61) Meier (2016), p. 283.

62) DTM, pp. 79-80.

63) Meier (2016), pp. 282-283.

64) Meier (2016), p. 284.

とやエルサレムのテオトコス教会が543年に奉献されたことなど、ペストの第1波の最中であつたいくつかの出来事がそれを示唆するという⁶⁵⁾。イコンに関して、6世紀中盤から私的な側面でも公的な側面でも崇拜が一般化していく。エデッサではキリストのイコンが544年にペルシアの攻撃から町を救った。その他の地域や都市でもさまざまなイコンが崇拜されるようになっていく⁶⁶⁾。そして皇帝は自らを神聖な存在として表象しようという動きを6世紀中盤から強めていくと、マイヤーは論じている⁶⁷⁾。

「典礼化」の急速な進展は、社会のさまざまな点から看取できるとマイヤーは主張する。例えば賛辞においては、ユスティニアヌス1世時代の前半には古典的なモデルがなお意識されていたのに対し、後半になると古典的な伝統が背景に大きく退き、キリスト教的なシンボリズムが前面に出てくる。また戦勝儀礼においても、534年の対ヴァンダルの凱旋式では共和政期以来の伝統を受け継ぐ行列がおこなわれたのに対し、559年の行列はまったく異なり、聖使徒教会でユスティニアヌス1世自身による祈りの時間が設けられるなど、きわめてキリスト教的色彩の強いものとなっていた。立法においても、530年代まではローマの偉大な過去への言及・参照がおこなわれていたのに対し、540年代以降になるとそのような要素が姿を消していく⁶⁸⁾。コンスル職の事実上の廃止(541年)⁶⁹⁾も、「典礼化」の傾向から理解することができる。歴史記述にも「典礼化」の影響は及び、プロコピオスの著作ではなお明確に認知できる古代ギリシアの伝統が急速に色あせていくのも6世紀後半～7世紀前半であるという⁷⁰⁾。

このような事例を挙げた上で、マイヤーはこのような社会の変化＝「典礼化」の背景として、ペストの流行が人びとの心に与えた大きな影響を指摘する。そしてそれが、古代末期から中世初期への変容(こうした変容は東ローマ/ビザンツ帝国の存続にとっても重要な要素となった)の一部を形成することとなる文化的再構築の過程に大きく関わっていたと考えるのである⁷¹⁾。

マイヤーの見解は、先述したコンラドの論考でもある程度は意識されていた「ユスティニアヌスのペスト」が人びとの心性に与えた影響、という問題に関して正面から取り組み、6世紀後半以降の社会の変化にペストの流行が大きな意味を持っていたことを強調した点で、きわめて重要な研究である。そしてそれは、人口減少や税収の減少といったペストの直接的・物質的な影響が中心であった従来の議論からは一線を画すものとなった。

以上要するに、「ユスティニアヌスのペスト」をめぐる議論はデュリアの研究によって新たな段階に達した。デュリアはそれ以前の研究では看過されていた碑文や発掘成果、パピルス文書などを利用することの重要性を明確にした。一方でデュリアの研究は「ユスティニアヌスのペスト」の影響を非常に小さく見積もるものであった。このような視点はサリスやマイヤーによって反論され

65) Meier (2016), pp. 284-285.

66) Meier (2016), pp. 285-286.

67) Meier (2016), pp. 286-287.

68) Meier (2016), pp. 287-290.

69) cf. M. Meier, "Das Ende des Konsulats im Jahr 541/42 und seine Gründe. Kritische Anmerkungen zur Vorstellung eines ‚Zeitalters Justinians‘", *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 138 (2002), S. 277-299.

70) Meier (2016), pp. 290-291.

71) Meier (2016), pp. 290-292.

る。サリスはデュリアと同様にさまざまな史料を使用しつつもデュリアとは大きく異なる結論を導き出した。マイヤーはサリスの議論を援用しつつ、「典礼化」という視点を導入して新たな方向から「ユスティニアヌスのペスト」の及ぼした影響を大きく評価した。

3 歴史研究者以外への影響

前章でまとめたように、デュリアの見解に対してはサリスやマイヤーらによる反論がおこなわれた。これらの反論は説得力を持つものであったため、2010年代に入ると概説書などでも「ユスティニアヌスのペスト」の及ぼした影響を比較的高く評価する記述が現われてくるようになった⁷²⁾。

その一方で、2000年代以降は「ユスティニアヌスのペスト」の及ぼした影響をかなり大きく評価する著作がいくつか現われ、それが歴史研究者以外にも流布するようになっていった。本章ではこのような潮流に関しても概観をおこなっておく。

このような潮流の源となったのは主に2つある。第一に、近年急速に進歩した自然科学の側面からの研究、そして第二に、一般読者を意識した著作である。

まず、自然科学研究の与えた影響について述べていく。21世紀に入ると、はじめに述べたように分子遺伝学が急速に進歩し、ペスト菌のゲノム解析が進められるようになった。そして2010年代に入るとかなり確度の高い解析結果が発表されるようになっていく。その際に無視できないのは、これらの研究が「ユスティニアヌスのペスト」のもたらした被害や影響をかなり大きく評価していることである。例えばワグナーらの2014年の分析では、「ユスティニアヌスのペスト」は「同時代の学者プロコピオスによると（議論はあるが）1億人の人びとが犠牲になったと見積もられ、ローマ帝国の終わりに寄与し、また古典古代から中世への移行を画した」⁷³⁾とされており、きわめて大きな災厄であったことが強調されている。他の研究でも同様の記述が（議論の前置きとして）書かれていることが多く⁷⁴⁾、このような記述から特に自然科学の研究者を中心に「ユスティニアヌスのペスト」の被害の大きさや、「古代から中世への変化を促すインパクトがあった」というイメージが強く印象づけられている可能性は否定できない。

より大きな影響を及ぼしたのは、一般読者を意識した著作の記述である。「ユスティニアヌスのペスト」を大きく扱った書物として、大きな反響を引き起こしたものとしては2007年に刊行されたローゼンの『ユスティニアヌスのノミペスト、帝国、そしてヨーロッパの誕生』⁷⁵⁾が挙げられる。書名からもうかがえる⁷⁶⁾ように、ローゼンの著作は「ユスティニアヌスのペスト」がローマ帝国にきわめて大きな影響を及ぼし、それが中世以降の西ヨーロッパの発展のきっかけになったと見なしている。ローゼンはこう述べる。

72) 一例として、St. Mitchell, *A History of the Later Roman Empire AD 284-641*, Chichester: Wiley-Blackwell, 2015², pp. 479-491.

73) Wagner et al. (2014), p. 319.

74) 例えば M. Feldman et al., "A High-Coverage *Yersinia pestis* Genome from a Sixth-Century Justinianic Plague Victim", *Molecular Biology and Evolution* 33-11 (2016), pp. 2911-2923, p. 2911. (<https://doi.org/10.1093/molbev/msw170>)

75) W. Rosen, *Justinian's Flea: Plague, Empire, and the Birth of Europe*, New York, 2007.

76) ノミは、吸血を通じてペスト菌の宿主であるげっ歯類と人間との間の媒介の役割を果たす。国立感染症研究所のウェブページで解説されている。URLは注11)参照。

（「ユスティニアヌスのペスト」による）パンデミックがなかったら、労働力の不足もなかった。労働力の不足がなかったら、農業革命もなかった。そしてそれゆえ、人口の優位を争うレースでのヨーロッパの勝利もなかった。……神聖ローマ帝国も、十字軍も、百年戦争も、異端審問も生じなかった。ヨーロッパの植民地も生まれなかった。シャルルマーニュも、ナポレオンも、あるいはヒトラーも。⁷⁷⁾

ローゼンの著作は、歴史研究における新しい成果があまり取り込まれていないことや誤りが多いことなどから、歴史研究者からは高い評価を受けることがなかった。例えばカルデリスは「ローゼンの本は学術的な著作ではなく、長々と議論する必要はない。……この本に書かれている歴史は誤りと誤解、そして時代遅れの考えかたに充ちている」⁷⁸⁾と評している。一方で一般の読者からは比較的好意的に受け入れられた⁷⁹⁾。

2017年、ハーパーの『ローマの運命—気候、病、そして帝国の終わり—』が刊行された⁸⁰⁾。ハーパーの著作は2世紀のいわゆる五賢帝時代から7世紀にいたるローマ帝国の歴史を、気候と疫病に着目しながら分析しようとした著作である。必ずしも一般向けに書かれた著作ではないが、一般紙などでも肯定的に取りあげられる⁸¹⁾など一般読者への訴求力も高い。一方でローゼンの著作とは異なって数多くの文献を参照しつつ議論を進めており、歴史研究者にこのハーパーの著作が引用・利用されることも多い⁸²⁾。

ハーパーの著作はユスティニアヌス1世時代だけでなく、2世紀以降の歴史を概観している。また疫病だけでなく気候の変化にも着目している点も特徴である。そのため、2世紀後半のいわゆる「アントニヌスの疫病」や3世紀の「キュプリアヌスの疫病」などについてもまとまった議論がおこなわれている。またユスティニアヌス1世時代に関しても、「ユスティニアヌスのペスト」だけでなく、536年からはじまったとされる「古代末期小氷期（Late Antique Little Ice Age: LALIA）」についても分析が及んでいる。

77) W. Rosen, op. cit., pp. 322-323.

78) A. Kaldellis, "(Review) *Plague and the End of Antiquity: The Pandemic of 541-750 / Justinian's Flea: Plague, Empire, and the Birth of Europe*", *Journal of Late Antiquity* 1-2 (2008), pp. 385-388, p. 388.

79) 例えば goodreads では評価の平均が 3.69. (https://www.goodreads.com/book/show/469493.Justinian_s_Flea) (最終閲覧日: 2022年11月18日) また *The Guardian* でも紹介されている。"Round the world on a rat", *The Guardian*, May 5, 2007. (<https://www.theguardian.com/books/2007/may/05/featuresreviews.guardianreview9>) (最終閲覧日: 2022年11月18日)

80) K. Harper, *The Fate of Rome: Climate, Disease, & the End of an Empire*, Princeton: Princeton University Press, 2017 (以下、Harper (2017) と略).

81) "The Fate of Rome by Kyle Harper review - climate, disease and the end of an empire", *The Guardian*, April 11, 2019. (<https://www.theguardian.com/books/2019/apr/11/fate-of-rome-kyle-harper-review>) (最終閲覧日: 2022年11月21日); "How the Environment Topples Empires: On Kyle Harper's 'The Fate of Rome'", *Los Angeles Review of Books*, December 7, 2017. (<https://lareviewofbooks.org/article/how-the-environment-topples-empires-on-kyle-harpers-the-fate-of-rome/>) (最終閲覧日: 2022年11月21日)

82) 筆者も旧稿でハーパーの議論を紹介している。小林功『生まれくる文明と対峙すること—7世紀地中海世界の新たな歴史像—』ミネルヴァ書房、2020年、255頁（注14）。また2022年に刊行された概説書でも、ハーパーの議論に大きく依拠した記述がなされている。南雲泰輔「ローマ帝国の衰亡と『古代末期』の気候変動—気まぐれな自然が蝕んだ帝国の回復力—」長谷川岳男（編著）『はじめて学ぶ西洋古代史』ミネルヴァ書房、2022年、252-272頁。

「ユスティニアヌスのペスト」について中心的に扱っているのは第6章「怒りのワイン搾り器」⁸³⁾である。「ユスティニアヌスのペスト」に関するハーパーの理解は、基本的にはこれまで紹介してきたサリスやマイヤーの議論の延長線上にあり、その点では新味があるわけではない。しかしハーパーの著作には2つの特徴が挙げられる。第一に、「ユスティニアヌスのペスト」の被害や影響をかなり大きく見積もっていることである。例えば死者数については（「黒死病」での推定死者数なども参考にしつつ）人口の約半分が541年からの第1波で失われ、その後の再流行でも人口が1回の再流行につき10[%]減少し、結果として600年頃までに東ローマ帝国の人口が約1/3に激減したと推定している⁸⁴⁾。第二に、語り口調がきわめて印象的で、センセーショナルといってもいいレベルに達していることである。上述した章のタイトルからもそれはうかがえるが、他にも例えばペストの到来について「爆弾が投下された (the bomb went off)」⁸⁵⁾と表現したり、ペスト（が人口の変動に及ぼした影響）について「夜の泥棒 (a thief in the night)」⁸⁶⁾などと表現していることなど、各所で確認できる。このような表現が一般読者の心にも響くことになったのかもしれない。

ただいずれにせよ、ハーパーの著作は「ユスティニアヌスのペスト」の影響を高く想定する研究に加え、特に2010年代以降の分子遺伝学（や古気候学）の成果を積極的に取り入れたものであり、21世紀の研究動向を巧みに取り込んだ上で著わされた著作と評価することができる。とはいえ「ユスティニアヌスのペスト」やその他の疫病、あるいは気候の変化の重要性を強調し、社会に与えた影響をかなり過大に見積もっている点是否定できないだろう。

4 論争の再発

これまで概観してきたように、「ユスティニアヌスのペスト」のもたらした影響については、かなり大きなものであったとする評価が2010年代までには強くなっていた。そしてそれは歴史研究者以外にもある程度共有されるようになっていく。ハーパーの著作は、このような傾向のある種の到達点だったといえるかもしれない。しかしこのような研究の潮流に対して、2010年代末には全面的に反論・批判する研究者が現われ、現在でも議論が続いている。

新たな反論・批判は、管見では2018年のハルドンやエルトンらによる、ハーパーの著作に対する厳しい批判からはじまった。ハルドンらは個々の議論の問題点に加え、読者に誤解を招きやすい記述方法や同時代史料の提示する数字を鵜呑みにする危険性、注や図表が不十分でずさんであることなどを指摘し、さらに気候変動と疫病の流行のみですべてを説明しようとする傾向が強いことを批判する。また『ローマの運命』というタイトルにも関わらず、5世紀における西方、そして7世紀における東方でのローマ帝国の失敗について説明がなされていないことも指摘する。そしてその上で、気候や疫病の重要性について否定はしないものの、社会経済史や文化史での成果を緊密に取り込んで全体像を示すべきであると強調している⁸⁷⁾。

83) Harper (2017), pp. 199–245.

84) Harper (2017), pp. 244–245.

85) Harper (2017), p. 206.

86) Harper (2017), p. 232.

87) J. Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (1):

(1) モーデカイとアイゼンバーグの主張

ハーバーだけでなくサリスやマイヤーなどの主張も含め、「ユスティニアヌスのペスト」の影響を大きく評価する研究動向について全面的に異を唱えたのが、モーデカイとアイゼンバーグである。モーデカイは上述したハーバー批判の論考にも著者の一人として名を連ねており、ハーバー批判の論考で「ユスティニアヌスのペスト」について展開される具体的な批判⁸⁸⁾も、モーデカイとアイゼンバーグの主張と共通している。

モーデカイとアイゼンバーグは2019年以降2人で、あるいはさらに他の研究者も加えた形で、共同で論考を次々と発表しているが、その主張は2019年に*Past and Present*に発表された論文で特に明確かつ詳細に論じられている⁸⁹⁾。ただ、この2人の議論が注目されたのは、他の研究者とも共同で同じ2019年に*Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS)*に発表した論文⁹⁰⁾ゆえでもあった。*PNAS*掲載論文における主張は*Past and Present*で展開されているものとはほぼ同一であるが、21世紀になってから整備されてきた各種データベースなどを駆使しつつ、2人の主張の根拠となるデータを数的に処理して分析している。そのため*PNAS*所収論文（に掲載されているデータ）は*Past and Present*所収論文の数値的根拠として機能しているだけでなく、数量的なデータ分析とその明解さが着目を浴びることとなった。本稿では以下、*Past and Present*所収の論考の内容を中心に、モーデカイとアイゼンバーグの主張を概観していく⁹¹⁾。

本稿でここまで述べてきたように、「ユスティニアヌスのペスト」をめぐる評価は、デュリアを別にすると全体としてはかなり大きく評価する傾向が主流である。モーデカイとアイゼンバーグもこのような傾向にあることを認め、その上でこのような傾向を支持する研究者を「最大化主義者(maximalist)」とまとめて批判する⁹²⁾。さらにそのような傾向が分子遺伝学者にも波及し、さらに学術的言説の中で事実として固定化されていくことを問題視する。モーデカイとアイゼンバーグはこのような研究動向に対して強く疑念を呈し、むしろ「ユスティニアヌスのペスト」が6世紀以降の人口動態、さらには社会に与えた状況は大きなものではなかったと主張する。その点でモーデカイとアイゼンバーグは1989年のデュリアの議論への回帰ということになり、2人もかかる方向性を

Climate”, *History Compass* e12508 (2018) (以下、Haldon et al. (2018a) と略). (<https://doi.org/10.1111/hic3.12508>); J. Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (2): Plagues and a crisis of empire”, *History Compass* e12506 (2018). (<https://doi.org/10.1111/hic3.12506>); J. Haldon et al., “Plagues, climate change, and the end of an empire: A response to Kyle Harper’s *The Fate of Rome* (3): Disease, agency, and collapse”, *History Compass* e12507 (2018) (以下、Haldon et al. (2018c) と略). (<https://doi.org/10.1111/hic3.12507>)

88) Haldon et al. (2018c), pp. 2–5.

89) L. Mordechai & M. Eisenberg, “Rejecting Catastrophe: The Case of the Justinianic Plague”, *Past and Present* 244 (2019), pp. 3–50 (以下、Mordechai & Eisenberg (2019) と略).

90) L. Mordechai, M. Eisenberg et al., “The Justinianic Plague: An inconsequential pandemic?”, *Proceedings of the National Academy of Sciences* 116–51 (2019), pp. 25546–25554 (以下、Mordechai et al. (2019) と略).

91) モーデカイとアイゼンバーグによる他の論文としては、以下のようなものがある。M. Eisenberg & L. Mordechai, “The Justinianic Plague: an interdisciplinary review”, *Byzantine and Modern Greek Studies* 43–2 (2019), pp. 156–180 (以下、Eisenberg and Mordechai (2019) と略); M. Eisenberg & L. Mordechai, “The Justinianic Plague and Global Pandemics: The Making of the Plague Concept”, *The American Historical Review* 125–5 (2020), pp. 1632–1667; L. A. White & L. Mordechai, “Modeling the Justinianic Plague: Comparing hypothesized transmission routes”, *PLOS ONE* 15–4 (2020), e0231256. (<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0231256>)

92) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 6–7.

意識している⁹³⁾。実際、モーデカイとアイゼンバーグは議論にあたって、碑文や貨幣、パピルス文書など、デュリアも使用した史料に依拠し、分子遺伝学の成果などデュリア以降の30年間の新たな研究蓄積も活用しながら議論を進めた上で、「ユスティニアヌスのペスト」が広範な地域に拡大し、高い死亡率を出した事例があったことは認めつつも、ペストの影響は破滅的ではなく、国家や帝国の崩壊をもたらすようなものではなかった、そして地中海世界の社会や人口に与えた中長期的影響は小さなものであった、と主張するのである。

モーデカイとアイゼンバーグはまず、文字史料の問題点について指摘する。2人は、ペストの流行について伝える同時代史料の記述の多くが非常に短く簡潔で、『復活祭年代記』のようにペストに関する記述がないものがあることを指摘する。また史料で疫病の記述があると、それをすべてペストの流行と理解することにも疑念を呈する⁹⁴⁾。

また2人は、「ユスティニアヌスのペスト」の主史料ともいべきプロコピオスの記述について、それをコンスタンティノープルでの被害を示すものとしての利用価値があることは認めつつも、その記述を帝国全体に拡大して解釈することの危険性を指摘する⁹⁵⁾。またプロコピオスにおいてすらペストに関する記述の量が少ないことや、マララスなど他の同時代史料ではさらに記述が少ないことを指摘して、ペストに関する記述の量の少なさはペストの持つ意義の小ささを示すものであると見なす⁹⁶⁾。もう一つの主要な同時代史料であるエフェソスのヨハネスの記述に関しても、コンスタンティノープルの状況に関する情報は詳細であるものの他の地域に関する状況は伝聞情報に過ぎず、しかも宗教的・道徳的教訓譚として語っている側面が強いと主張する⁹⁷⁾。さらにトゥールのグレゴリウスが伝えるフランク王国での疫病⁹⁸⁾についても、ペストではなく他の感染症か風土病であると考え。グレゴリウスは疫病だけでなく、飢饉や洪水、血の雨、虫害などの他の自然災害も終末の接近の印として記述しており、ペストの大きな被害を示すものではないと2人は考える⁹⁹⁾。全体としてモーデカイとアイゼンバーグはデュリアと同様、第1波の流行でコンスタンティノープルに一定の被害が出たことは認めるものの、その他の地域での流行では大きな被害が出たことを史料から看取できないとする。またこれらの史料の伝える死者数に関して疑念を呈するだけでなく、ペストによって命を失った著名な人物が非常に少ない（第1波では誰もいない）ことも、死者数の多さに疑問符をつける事例であると指摘する¹⁰⁰⁾。

ユスティニアヌス1世の立法活動については、年ごとの立法数が顕著に減少するのはペスト到来前の539年であり、ペストの第1波の流行と立法活動の変化については関係がないと主張する。またコンスタンティノープルでペストが猖獗をきわめた542年4-8月に発行された4本の法律も、ペ

93) Mordechai & Eisenberg (2019), p. 6.

94) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 8, 17.

95) Mordechai & Eisenberg (2019), p. 10.

96) Mordechai et al. (2019), p. 25547.

97) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 11-13.

98) トゥールのグレゴリウス『歴史十書』においてフランク王国やガリア地域におけるペストに関する記述と思われる箇所は何ヶ所かある。例えば4巻5、4巻31、6巻14-15、9巻21-22、10巻23。

99) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 13-16.

100) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 19-20.

ストに関係していないと指摘する。先述した新法 122 も、その文面からペストとの関連を看取するのは困難であるという¹⁰¹⁾。エジプトのパピルス文書に関して、540 年代の前後で数に大きな変化がないこと、そして 6 世紀のエジプトの大所領の状況について、比較的その内実が分かっているアピオン家の文書に関して 540 年代以降のほうが文書数が増加していることから、ペストの影響を否定する¹⁰²⁾。

貨幣も、ペストがローカルな社会に与えたインパクトを示すものではないと 2 人は考える。サリスが指摘した金貨と銅貨の交換比率も、比率の急変はペストの到来前に起きているとし、ペストの流行中に変化があったとしても、その比率はすぐに旧に復しているとも指摘する¹⁰³⁾。銅貨の重量の変化についても軍事遠征など他の要素を無視していることや「ローマ・ビザンツ帝国史のなかで最も重い貨幣からたった 10[%]だけ」軽い¹⁰⁴⁾と、変化量がさほど大きなものではないことを強調し、ペストの影響を重視しない立場をとる。また「軽量ソリドゥス金貨」に関してそれが通常の重量のソリドゥス金貨をすべて置き換えたわけではないことや、その発行年が 538 年あるいは 539 年であるとして、サリスの主張を否定する¹⁰⁵⁾。

碑文に関して、6 世紀を通じてペストに関して言及している碑文の数が非常に少ないことを挙げ、言及しているわずかな碑文だけで一般化するの危険であると 2 人は主張している¹⁰⁶⁾。

モーデカイとアイゼンバーグは考古学のデータにも注意を向ける。2 人は、歴史学者はあいまいな証拠を元に過大な解釈をおこなう傾向があるとする。そしてシリア・パレスティナ地域などを例に取りつつ、大規模な人口減や荒廃が起きていたという「最大化主義者」の見解は、近年の発掘成果¹⁰⁷⁾からは支持されないと主張する¹⁰⁸⁾。

モーデカイとアイゼンバーグは、近年研究が進展している花粉分析のデータも使用する。花粉のデータからは、6 世紀中盤に穀物類の花粉の減少（農業生産の減少を示唆）も、松の花粉の増加（荒蕪地の増加を示唆）も看取できず、6 世紀中盤に土地利用に大きな変化が看取できない、つまりペストの影響が看取できないと指摘した¹⁰⁹⁾。

さらに 2 人は、近年の分子遺伝学の成果にも注意を向ける。これまで述べてきたように近年、ペスト菌のゲノムが 6 世紀の人骨から検出される事例が増えている。しかし検出された地点がいずれも西ヨーロッパであり、東地中海地域の事例がないことから、2 人はペストの流行の程度に疑念を呈する。そしてドイツのミュンヘン近郊のアッシュハイムとアルテナーディングの墓地に埋葬されていた人骨からペスト菌の DNA が検出されたという、近年の研究成果¹¹⁰⁾に注意を向ける。これ

101) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 21-22; Mordechai et al. (2019), pp. 25547-25548.

102) Mordechai et al. (2019), p. 25548.

103) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 22-23.

104) Mordechai & Eisenberg (2019), p. 23.

105) Mordechai & Eisenberg (2019), p. 23.

106) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 24-25; Mordechai et al. (2019), pp. 25548-25549.

107) G. Avni, *The Byzantine-Islamic Transition in Palestine: An Archaeological Approach*, Oxford: Oxford University Press, 2014, pp. 328-329.

108) Mordechai & Eisenberg (2019), p. 26.

109) Mordechai et al. (2019), pp. 25550-25551.

110) いくつかの成果が発表されているが、例えばアッシュハイムについては Wagner et al. (2014). アルテナーディングについては M. Feldman et al., op. cit.

らの墓地からは比較的多数の人骨が発見されているが、ペスト菌のDNAが検出された人骨はごくわずかである。またアッシュハイムでは急いで埋葬した形跡がないこと、アルテナーディングでは墓地が長期間使用され続けている（共同体に連続性がある）ことなどを挙げて、ペストによる人口の急減の証拠とみなすことに警鐘を鳴らす。また、アッシュハイムやアルテナーディングなど、ドイツ地域の小村からペスト菌のDNAが検出されたことは、広範な地域でペストが流行していたことの証拠とはならないとも主張している¹¹¹⁾。

加えてモーデカイとアイゼンバーグは、ペストの感染手段にも関心を向ける。2人はまず、ペストの宿主となる共生性のクロネズミ (*Rattus rattus*) の骨が西欧を除く地中海世界ではあまり発見されていないことから、ペストの流行がそれほど深刻なものではなかった可能性を指摘する。一方で2人は、ネズミを宿主としない感染—飛沫感染する肺ペスト—はその感染速度の速さゆえ、6世紀の流行の特徴とは一致しないとして流行の可能性を排除している¹¹²⁾。

さらにモーデカイとアイゼンバーグは、ペスト以外の社会的・環境的条件を「最大化主義者」は考慮に入れていないと批判する。それは例えば、感染拡大を抑制するための試みや、感染が一段落した後の人口回復の可能性などである。実際、20世紀のインドでのペスト流行時の事例では、流行の終了後に出生率が急増しているという。アッシュハイムでも墓地の埋葬数から判断すると6世紀末には人口が回復している¹¹³⁾。

マイヤーの主張する6世紀中盤以降の「典礼化」の進展についてもモーデカイとアイゼンバーグは、そのような変化はすでに1世紀以上前から進展していたと論じて、6世紀中盤に画期を見ることを否定している。2人によるとユスティニアヌス1世の治世に起きた変化は、5世紀の政治的断片化から続く地中海世界の再編過程の一環であり、ペストはそうしたプロセスを時と場合によっては加速させる一因になったかもしれないが、全体の状況を大きく変動させるものではなかった¹¹⁴⁾。

このようにモーデカイとアイゼンバーグは、「ユスティニアヌスのペスト」の影響を大きく評価するサリスらの主張に対して、ほぼすべての論点に関して批判をおこなう。ハーパーの著作に対するハルドンらの先述した書評の中でハーパーの議論は「論旨に適合するように、そして劇的なインパクトを最大化するために証拠がしばしば歪められている」と断じられている¹¹⁵⁾が、モーデカイとアイゼンバーグは「最大化主義者」と一括して批判することで、同様の評価をハーパー以外の研究者にも与えていると言ってもいいだろう。

(2) モーデカイとアイゼンバーグに対する反論

モーデカイとアイゼンバーグの主張は、上述したように数量的なデータ分析を駆使した手法が着目されたこともあいまって「ユスティニアヌスのペスト」に関する新しい見解として、2019年

111) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 26–32; Mordechai et al. (2019), pp. 25551–25552.

112) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 32–33.

113) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 34–39. 2人は社会的変化を比較する時に「黒死病」だけでなく、19世紀末からのペストのパンデミックの状況をも考慮に入れるべきであるという指摘もおこなっている。Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 39–44.

114) Mordechai & Eisenberg (2019), pp. 47–48; Eisenberg and Mordechai (2019), pp. 177–178.

115) Haldon et al. (2018a), p. 4.

12月にはプリンストン大学から広報され¹¹⁶⁾、CNNやHaaretzなどでも報道される¹¹⁷⁾など、一般にも知られるようになった。またこの直後から全世界に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)との関わりからも、注目を受けている¹¹⁸⁾。加えて2人の主張に基づいた研究が公刊されるなど、その主張に賛意を示す研究者も増えてきている¹¹⁹⁾。

その一方で、2人の主張に対する厳しい批判も生じている。最初に明確な反論をおこなったのはマイヤーであった¹²⁰⁾。マイヤーはモーデカイとアイゼンバーグが駆使した数量的分析手法の限界や問題点を指摘しながら、2人の主張に対して反論をおこなっていく。まずマイヤーは「最大化主義者」という批判に対して、議論がこれまでどのようにおこなわれてきたのかを無視した極度な単純化がおこなわれていると批判する¹²¹⁾。この指摘は、2人が「最大化主義者」とする研究者の中にも、その議論にはかなりの差異があるにも関わらず、ハーパーのようにかなり極端に「ユスティニアヌスのペスト」の影響を見積もる論者の立場で全部を包括して一般化させるような表現の問題点を指摘したといえる。

次にマイヤーは、文献史料の分析手法や解釈に関してモーデカイとアイゼンバーグの数量的分析手法の問題点を指摘する。マイヤーは、モーデカイとアイゼンバーグがペストに関する記述の分量にばかり注目し、そして数量的分析に終始した結果、それらの記述の示す「質」を軽視していることを問題視する¹²²⁾。そもそもペストが当時の人に及ぼした影響や重要性は、記述の分量で決定されるのではない。例えばプロコピオスの著作の中でペストに関する記述の分量は全体の約1[%]に

116) “Maybe the first plague wasn’t that bad, say researchers”, *Princeton University*, December 2, 2019. (<https://www.princeton.edu/news/2019/12/02/maybe-first-plague-wasnt-bad-say-researchers>) (最終閲覧日：2022年11月18日)

117) “The plague probably didn’t wipe out the Roman Empire and half the world’s population, new study suggests”, *CNN*, December 2, 2019. (<https://edition.cnn.com/2019/12/02/world/plague-roman-empire-scn/index.html>) (最終閲覧日：2022年11月18日); “Roman Empire Not Destroyed by Plague After All, Say Historians”, *Haaretz*, December 2, 2019 (<https://www.haaretz.com/archaeology/2019-12-02/ty-article/.premium/roman-empire-not-destroyed-by-plague-after-all-say-historians/0000017f-e0e5-d7b2-a77f-e3e7510b0000>) (最終閲覧日：2022年11月18日); “The Justinianic Plague’s Devastating Impact Was Likely Exaggerated: A new analysis fails to find evidence that the infamous disease reshaped sixth-century Europe”, *Smithsonian Magazine*, December 3, 2019 (<https://www.smithsonianmag.com/smart-news/justinianic-plagues-devastating-impact-was-likely-exaggerated-180973680/>) (最終閲覧日：2022年11月18日)。

118) M. Eisenberg, L. Mordechai, R. Alpert, “Why treating the coronavirus like the Black Death is so dangerous: Our standard outbreak narrative conceals the reality of pandemic diseases”, *The Washington Post*, February 6, 2020 (<https://www.washingtonpost.com/outlook/2020/02/06/why-treating-coronavirus-like-black-death-is-so-dangerous/>) (最終閲覧日：2022年11月21日)。cf. K. Sessa, “The Justinianic Plague”, *Origins: Current Events in Historical Perspective*, June 2020 (https://origins.osu.edu/connecting-history/covid-justinianic-plague-lessons?language_content_entity=en) (最終閲覧日：2022年11月21日); J. Magalhaes, “Pandemic and Inequality: The Justinianic Plague”, *Ancient History From Below*, October 20, 2021 (<https://en.subalternsblog.com/post/pandemic-and-inequality-the-justinianic-plague>) (最終閲覧日：2022年11月21日)

119) 例えば A. U. de Giorgi & A. Asa Eger, *Antioch: A History*, London: Routledge, 2021 (以下、*Antioch* と略), p. 209; Tsiamis (2023), pp. 102-103.

120) M. Meier, “The ‘Justinianic Plague’: An “Inconsequential Pandemic”? A Reply”, *Medizinhistorisches Journal* 55-2 (2020), pp. 172-199 (以下、Meier (2020) と略)。

121) Meier (2020), pp. 174-175.

122) Meier (2020), pp. 176-177. マイヤーは2016年の論考でも同様の発言をおこなっている。Meier (2016), p. 277. またマイヤーはモーデカイらが史料の残存状況(6世紀の著作のすべてが現在に伝わっているわけではない)を無視してデータ分析をおこなっていることの問題点も指摘している。

過ぎないが、しかしそれをもってプロコピオスにとってペストが大した意味を持たなかったと判断することはできない。現在にいたるまで数多くの人びとがこの約1[%]しかない記述に着目しているのであり、その質的効果は非常に大きい。モーデカイとアイゼンバーグが、ペストに関する記述の分量が非常に少なくペストの重要性を看取できない実例として挙げた、第17波のペストの流行(732-735年)に関する『テオファネス年代記』の1文だけの記述¹²³⁾に関しても、マイヤーは分量だけで重要性を判断することの危険性を指摘する—8世紀前半にこの病が流行した時には、(ペストは)541年以降の風土病となっていたので、もはや人びとに大きな衝撃を引き起こすことにはならなかった。にもかかわらず、テオファネスはペストの流行を重要な事件と見なし、言及すべき唯一の出来事として選択した。つまりこの短い1文は、モーデカイとアイゼンバーグの主張とは正反対のことを示唆しているのだ¹²⁴⁾。

立法に関しても、マイヤーはモーデカイとアイゼンバーグの主張に疑念を呈する。まずマイヤーは、542年3月の新法(勅法7)が明確に大量死について言及している¹²⁵⁾こと、にもかかわらず2人がこの新法を無視していることを指摘する¹²⁶⁾。また、ペストに直接言及はしないものの、明らかにペストへの対応となっている立法(545年の新法128など)の存在も指摘する。加えてマイヤーは、540年代以降になるとユスティニアヌス1世の関心が教会・宗教政策に向けたため、結果として立法数が減少したことや、530年代までの立法や改革の結果、必要とすべき立法が減少していた可能性など、540年代の社会的状況を無視してモーデカイとアイゼンバーグが議論を組み立てていることにも批判的である。モーデカイらの主張は数量分析に重きを置き過ぎて、540年代前後の歴史的な経緯や文脈を軽視していると、マイヤーは指摘するのである¹²⁷⁾。

マイヤーはパピルス文書に関しては、そもそも元首政期から疫病に関する言及がほとんどないことや、史料の残存状況を軽視して数量的分析をおこなうことの危険性を指摘する¹²⁸⁾。

次に碑文に関して、マイヤーはモーデカイとアイゼンバーグの解釈の恣意性について指摘する。2人は碑文数の増減に関して一時的変化は考慮しないとしているにも関わらず、この基準を無視して543年以降のローマ市での碑文の減少を考慮している。またパレスティナ・アラビアでの540年代以降の碑文数の変化を無視している。またすでにサリスが指摘しているような、死者数の多さゆえに急いで埋葬する必要があるため、墓碑作成の余裕が生じなかった可能性や、碑文を作成する金銭的余裕のない貧民が数多く犠牲になった可能性などを無視していると非難する¹²⁹⁾。

貨幣に関しても、数量的分析に終始してそれが何を表象しているのかについて考えていないこと

123) 『テオファネス年代記』の732/33年の項は「この年、シリアで疫病(θανατικὸν)が発生し、多くの人びとが死んだ。」という1文だけで構成されている。Theophanes Confessor, C. de Boor (ed.), *Chronographia*, Leipzig, 1883, p. 410.

124) Meier (2020), pp. 177-178.

125) W. Kroll and R. Schöll (ed.), *Corpus iuris civilis vol. 3*, Berlin, 1895, p. 764. 「死がとりまく状況が、すべての地域に広がっている(εις πάντας τοὺς τόπους διελθοῦσα τοῦ θανάτου περίστασις)」: cf. *The Novels of Justinian*, p. 1044 (n. 5).

126) マイヤーは、モーデカイとアイゼンバーグが542年4月からの法律を論拠として議論をおこなっており、3月の新法を除外していることの恣意性も指摘する。Meier (2020), p. 179 (n. 36).

127) Meier (2020), pp. 179-181.

128) Meier (2020), pp. 181-182.

129) Meier (2020), pp. 182-183.

を問題視する¹³⁰⁾。

花粉分析については、モーデカイとアイゼンバーグの主張にあわないデータ（トルコ中北部での松の花粉の増加）を「重要ではない」¹³¹⁾と切り捨てる点や、花粉採取地点が古代末期に農業が盛んな地域の状況を反映しているのかが示されていない点などを指摘している¹³²⁾。

分子遺伝学の成果の利用方法についてもマイヤーは疑念を呈する。モーデカイとアイゼンバーグは、アッシュハイムなど文字史料に言及のない辺境部の小村でペスト菌のDNAが検出されたとしても、それは広範なペストの流行の証拠とはならないと主張するが、マイヤーはこの論理を疑問視する。むしろ、文献に言及されない、ローマ帝国の領域外の小村にまでペストの流行が及んでいた証拠とみなすべきである、とマイヤーは主張する。また「黒死病」と異なり、流行の原因となった生物型のペスト菌が現在まで生き残っていないことを根拠に、モーデカイらは「ユスティニアヌスのペスト」を引き起こしたペスト菌の毒性が弱かったと主張するが、この議論には説得力がなく、論拠も薄弱であることをマイヤーは指摘している¹³³⁾。

これらの個別の議論を踏まえた上でマイヤーは、数量化と人口の増減のみに着目したモーデカイとアイゼンバーグらの分析では不十分であり、文化的局面の変化も踏まえた分析の重要性を強調する¹³⁴⁾。そしてまた、ペストは他に何も災厄がない状態の時に起きた単一の惨事なのではなく、様々な災厄が立て続けに起きた何十年かのできごとの一つであり、このような様々な災厄という文脈の中にペストを位置づけることによって、個々のペストの起きていた年代に焦点をあてた数量的分析だけでは不十分であることをも、マイヤーは指摘する¹³⁵⁾。そしてその上で、モーデカイやアイゼンバーグらによって批判された「典礼化」のプロセスの重要性について再度強調する¹³⁶⁾。古代末期から中世初期へと変容していく文化的再構築のプロセスの中で、「ユスティニアヌスのペスト」は大きな役割を果たしたのであり、死者数の数やそれともなう人口的・経済的な変化よりも強調されるべき観点であるとマイヤーは論じる。確かに人口学的な問題も重要な論点ではある。しかしながら疫病のプレッシャーの下で社会がどのように変化していったのか、ということのほうかはるかに重要であると、マイヤーは強調するのである¹³⁷⁾。

マイヤーの反論は、当時の社会の文化的状況を考慮に入れた分析をおこなうためには数量的分析だけでは限界があることを強調している。またモーデカイらの分析方法に潜む恣意性の指摘も無視できない。

2022年にはサリスも、モーデカイとアイゼンバーグらの主張に対して反論をおこなった¹³⁸⁾。サリスもまた「『最大化主義者』のコンセンサス」や「大惨事主義者 (catastrophist) のパラダイム」が

130) Meier (2020), pp. 183-184.

131) Mordechai et al. (2019), p. 25550.

132) Meier (2020), pp. 184-185.

133) Meier (2020), pp. 185-186.

134) Meier (2020), pp. 186-187.

135) Meier (2020), p. 187.

136) Meier (2020), pp. 187-192.

137) Meier (2020), pp. 192-193.

138) P. Sarris, "New Approaches to the 'Plague of Justinian'", *Past and Present* 254 (2022), pp. 315-346 (以下、Sarris (2022) と略).

広く一般化していることを否定し、デュリアのようなペストの影響を小さく評価する傾向（サリスのいう「修正主義者」）の潮流もあったことを指摘する。そしてモーデカイとアイゼンバーグの主張も、デュリア以来の研究潮流の焼き直しであると指摘する¹³⁹⁾。そしてその上で「修正主義者」の研究手法の問題点として、文脈を無視して稚拙で問題の多い文字史料の「定量化」を優先する傾向があることであると¹⁴⁰⁾。これはマイヤーの指摘とも共通するところである。

「ユスティニアヌスのペスト」に関する記述は、6-8世紀にさまざまな言語で書かれ、その著者が所属する社会階層や信仰、政治的・地理的環境も多岐にわたる。このような多様性は、ペストがさまざまな地域のさまざまな社会に大きなインパクトを与え、きわめて深遠な結果を引き起こしたことを示していると、サリスは指摘する。したがってこれらを「文学的トポス」とみなす（デュリア）モーデカイらの解釈を全面的に否定する¹⁴¹⁾。

次にサリスは、プロコピオスとエフェソスのヨハネスが伝える、ペストの第1波における死者数について、その数が公的な記録を根拠にしている可能性や、「黒死病」など後の時代のペストの致死率をも想起すると必ずしも誇張とはいえない可能性を示唆する¹⁴²⁾。

そしてサリスもマイヤーと同様、モーデカイとアイゼンバーグらが統計学的分析に依存して「ユスティニアヌスのペスト」の重要性を軽んじようとしていると批判する。2人の、同時代史料の扱い方に対するサリスの批判も、マイヤーと共通する点が多い。確かにプロコピオスの記述の中でペストに関する記述の分量がごくわずかなことは事実であるが、しかし『戦史』において、軍事関連以外のテーマのパーセンテージが低いことは当然であるとサリスはいう。むしろ、軍事に関する記述を一旦中断してまで、プロコピオスはコンスタンティノーブルで経験した疫病の惨事を印象的に叙述したのであり、このことのもつ意味、そしてそれが後代の人びとにも強い印象を残した意味は大きなものがあるという¹⁴³⁾。

法律やパピルス文書などでペストに関する言及が乏しいという指摘に対してサリスは、同様の指摘がすでにデュリアによってされていること、そしてサリス自身が（上述したように）詳細に批判を加えていることを指摘する¹⁴⁴⁾。サリスはその上で若干の補足を加える。まず立法に関して、541年以降の立法の数の減少に関しては543年の「三章問題」勃発や553年のコンスタンティノーブル第2全地公会議の開催など、ユスティニアヌス1世の関心が神学的・宗教的方面に急速に傾いていったこと（この指摘もマイヤーと共通する）、そしてこのような関心の変化の背景としてペストの流行や皇妃テオドラの死（548年）などがあった可能性を指摘する¹⁴⁵⁾。また542-545年にはペストの流行に対応するための複数の立法がおこなわれていることを指摘する。そしてそれらの立法の中にはモーデカイらが主張するようにコンスタンティノーブルに対してのみ効力を持つものだけでなく、帝国規模で効力を持つものがあることをも指摘している¹⁴⁶⁾。そしてこれらの立法から、542-

139) Sarris (2022), pp. 321-323.

140) Sarris (2022), p. 324.

141) Sarris (2022), pp. 324-325.

142) Sarris (2022), pp. 325-327. ただしこの主張に関しては意見が分かれるところであろう。

143) Sarris (2022), pp. 327-328.

144) Sarris (2022), pp. 328-329.

145) Sarris (2022), pp. 330-331.

146) Sarris (2022), pp. 331-332. サリスは2002年の論考でも同様の指摘をおこなっている。注54) 参照。

545年にローマ国家はペストによる人口の急減に直面し、そのダメージを抑制するための努力をおこなっていた時期であることがわかるとサリスは指摘している¹⁴⁷⁾。

貨幣については、サリスは以前のデュリアに対する反論をくり返した上で、モーデカイらの批判は自分たちに都合のいい古い研究だけをピックアップして根拠としており、最近の研究を無視していると批判する。そしてこれに加えて、542-543年の貨幣においてユスティニアヌス1世の肖像の首とあごの下に、ペストによるリンパ節の腫れが描かれているものがあることをも指摘している¹⁴⁸⁾。

パピルス文書については、その総数に対するモーデカイらの誇張を指摘した上で、パピルス文書に記載される内容は一般的には支出や収入についての文書や領収書などであり、そのような文書にペストの記述があることは稀であること、土地所有者にペストが与えたインパクトについての記載のある所領明細などがほとんどないことを指摘し、ペストの影響を知るための史料としての限界を指摘する¹⁴⁹⁾。エジプトのパピルス文書を主史料として古代末期のエジプトの所領や経済活動について詳細な検討をおこなった¹⁵⁰⁾ サリスならではの指摘といえよう。そして最近刊行されたパピルス文書から、アピオン家の所領が6世紀後半にはその拡大が止まっていることが明らかになるとサリスは指摘する。このような状況はペストの流行の結果、大所領が拡大よりも統合の維持やコントロールの強化に留意するようになったことを示すという。そしてかかる傾向は、6世紀後半にエジプトでの借地権が小作に有利な方向になる傾向とも符合する¹⁵¹⁾。つまりペストの流行の結果生じた労働人口の減少に対応するための動きとして、どちらも理解できるのである。

次にペスト菌のDNAを検出できた人骨の数が少ないというモーデカイらの主張に関しても、サリスは疑念を呈する。DNAの検出技術が進歩してきたとはいえ、現時点では費用の点、そして人骨の埋葬状況による劣化などから、なおもさまざまな困難がある。このような厳しい条件下にあるにも関わらず、ペストに感染したことが確認できる頭骨がわずかでも確認できるのは、現在の分析技術からするとかなり大きな意味を持つと、サリスは考える。またペストに感染したことがわかる人骨の存在から、この犠牲者をとりまく環境がどのようなものであったのか、そしてこの犠牲者がなぜペストに感染したのか、さまざまな観点からの考察が必要で、数字だけで片づく問題ではないとも主張する¹⁵²⁾。

このような個別の反論・指摘を重ねた上でサリスは、今後の研究をどのように進めていくのかについて、モーデカイとアイゼンバーグらに対する批判もおこないつつ、以下のように総括する。第一に、議論をおこなう際に過度に単純化して語ることや、議論をリセットするために何が歴史的「証拠」なのか再構成しようとするのを排除する必要があるという。ペストが変化の唯一の要因ではないのは確かだが、それはペストが変化の原因ではないことを示すわけではない。「修正主義者」たちの議論でくり返される根本的かつ核心的な過ちは、この点にあるとサリスは論じる¹⁵³⁾。

147) Sarris (2022), p. 333.

148) Sarris (2022), pp. 333-335.

149) Sarris (2022), pp. 335-336.

150) P. Sarris, *Economy and Society in the Age of Justinian*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

151) Sarris (2022), p. 336.

152) Sarris (2022), pp. 337-339.

153) Sarris (2022), pp. 339-340.

「ユスティニアヌスのペスト」がその他の要因とともに歴史的変化を促した要因の一つである、という視点はマイヤーのそれとも共通するものである。

第二に、ペストが与えたインパクトは社会によって差異が存在するが、最悪の事例から影響を過大評価することも、逆に最良の事例から過小評価することも避けるべきである¹⁵⁴⁾。

第三に、ある病の影響が「重大」か否かは、容易に評価できない。歴史上のパンデミックの持つ重要性は、そのパンデミックがある社会を「崩壊」させたかをもって第一に判断できるものではない。例えば東ローマ国家は確かに、「ユスティニアヌスのペスト」に見舞われつつも、6世紀後半以降も存続しているので、「崩壊」はしていない。しかしこれはモーデカイらが主張するように、ペストの脅威が小さかったことを示すわけではない¹⁵⁵⁾。

第四に、ペストによって人口がどの程度減少したかを基準として、「最大化主義者」や「最小化主義者 (minimalist)」といった言葉で研究者を安易にグループ化すべきではない¹⁵⁶⁾。

このような指摘をおこなった上でサリスは、古くから知られている史料と新たな成果の双方を総合して「ユスティニアヌスのペスト」の分析をおこなう必要性の指摘に加え、古代末期のローマ史研究者だけでなく、医学史研究者などさまざまな分野の研究者によって議論を進めていくべきであると統括している¹⁵⁷⁾。

サリスの主張にはマイヤーの主張とも共通するところが多く、モーデカイとアイゼンバーグらの研究手法に対する全面的な批判となっている。また長年エジプトのパピルス文書やローマ法の分析をおこなってきたサリスの本領も十分に発揮された議論が展開されているともいえる。

5 おわりに～今後の議論の方向性は？～

ここまで見てきたように、「ユスティニアヌスのペスト」の影響をどのように評価するのかについては、長らく議論が続いてきた。そして現時点では「ユスティニアヌスのペスト」の影響をかなり小さく評価するモーデカイとアイゼンバーグの主張と、6世紀中盤以降の社会に深遠な影響を及ぼしたと考えるマイヤーやサリスの主張が対峙している状態にある。これから議論がどのような方向へ向かうのかは判断がつかないが、今後の議論のために意識しておかねばならない点はいくつか指摘できる。

第一に、「ユスティニアヌスのペスト」だけを取りあげて、6世紀中盤以降のローマ帝国や地中海・中近東地域の社会や国家の変容を分析するだけでは、明確な像を導き出すことはできない。6世紀中盤、あるいはその前後の時期をも含めて、地中海・中近東地域に起きていたさまざまな変化の要素を考慮に入れ、ペストの流行もそうした要素の中の一つとして分析をおこなっていくことが求められる。このような姿勢は、マイヤーやサリスにも、またモーデカイやアイゼンバーグにも見

154) Sarris (2022), p. 340.

155) Sarris (2022), pp. 340-341. 6世紀後半以降、東ローマの社会にはペストをはじめとするさまざまな緊張が生じ、それが7世紀にペルシアやアラブの侵入に対応する力を大きく削ぐことになったと、サリスは考えている。

156) Sarris (2022), pp. 341-342.

157) Sarris (2022), pp. 342-346.

られる¹⁵⁸⁾ものであるし、その他の研究者によってもくり返されている視点である。例えばホーデンは2005年に、「ユスティニアヌスのペスト」はユスティニアヌス1世の治世や7-8世紀の変化における大きな要因の一つであるが、いくつかある要因の一つに過ぎないと指摘している¹⁵⁹⁾。このような視点は、今後の議論においても常に保持されるべきである。

「ユスティニアヌスのペスト」以外の「大きな要因」としては、ユスティニアヌス1世の治世に関連するものでいうならば長期化した東ゴート王国との戦争、540年にアンティオキアに大きな被害を及ぼしたササン朝ペルシアとの断続的な戦争、そして地震¹⁶⁰⁾などが想定できるが、近年では気候も重視されるようになってきている。古気候学の研究の進展によって、ユスティニアヌス1世の治世中盤以降、気候が急速に寒冷化したことが知られている。「古代末期小氷期 (LALIA)」であり、例えばハーパーは第3章で紹介したようにLALIAの影響も考慮に入れながら分析をおこなっている。LALIAによる生態の変化がペストの流行の前提条件の一つになった可能性も指摘されており¹⁶¹⁾、「ユスティニアヌスのペスト」の分析をおこなう上でも、気候の変化を念頭におく必要があるだろう。

ただし、LALIAの及ぼした影響についても、「ユスティニアヌスのペスト」をめぐる議論と同様の問題がはらんでいることは知っておかねばならない。LALIAは536年、540年、547年と相次いで起きた大火山の噴火によって発生した異常気候であるが、LALIAがどの程度の期間続いたのかについては議論があり、従来は660年頃までとされてきたが¹⁶²⁾、最近ペレグリンは560年頃までと主張しており¹⁶³⁾、終期には大きな差異が生じている。

第二に、広範な地域で感染が拡大し、ブリテン諸島にまで流行が及んだ第1波を別にすると、「ユスティニアヌスのペスト」の流行した地域には偏りが見られる。特にシリア・パレスティナ地域での流行発生の頻度は多く、風土病的な側面を持ちつつあったことが知られている¹⁶⁴⁾。したがって「ユスティニアヌスのペスト」の与えた（特に経済的な）影響に関しては、地域的な特性も考慮に入れる必要性がある。また都市部と農村部での流行の差異なども意識する必要がある。

158) アイゼンバーグとモーデカイの2022年の論考は基本的な主張は変わっていないものの、ペストの及ぼした影響をこれまでより若干強く意識した論調になっているようにも感じられる。M. Eisenberg and L. Mordechai, "The Short- and Long-Term Effects of an Early Medieval Pandemic", in: A. Izdebski et al. (eds.), *Perspectives on Public Policy in Societal-Environmental Crises: What the Future Needs from History*, Cham: Springer, 2022, pp. 291-303 (以下、Eisenberg & Mordechai (2022) と略), pp. 300-301.

159) P. Horden, "Mediterranean Plague in the Age of Justinian", in: M. Maas (ed.), *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge: Cambridge University Press, 2005, pp. 134-160, p. 155: cf. L. I. Conrad, "Die Pest und ihr soziales Umfeld im Nahen Osten des frühen Mittelalters", *Der Islam* 73 (1996), S. 81-112, S. 112.

160) アンティオキアはユスティニアヌス1世の治世のほぼ全期間（特に前半に相当する525-542年）、火事や地震、ペルシアの攻撃、そしてペストの被害を受けている。*Antioch*, pp. 200-216.

161) D. Stathakopoulos, "Invisible Protagonists: Justinianic Plague from a Zoocentric Point of View", in: I. Anagnostakis et al. (eds.), *Animals and Environment in Byzantium (7th - 12th c.)*, Athens: The National Hellenic Research Foundation, 2011, pp. 87-95, pp. 92-93.

162) U. Büngten, "Cooling and societal change during the Late Antique Little Ice Age from 536 to around 660 AD", *Nature geoscience* 9 (2016), pp. 231-236. (<https://doi.org/10.1038/ngeo2652>)

163) P. N. Peregrine, "Climate and social change at the start of the Late Antique Little Ice Age", *The Holocene* 30-11 (2020), pp. 1643-1648. (<https://doi.org/10.1177/0959683620941079>)

164) Tsiamis (2023), pp. 123-139.

第三に、数量的な分析は今後も不可欠であるが、恣意的にならないように留意する必要がある。それはどのように数量データを扱うか、という点にとどまるものではない。「数が多いか少ないか」を主要な判断基準とすることにも、医学史研究者グリーンが指摘するように問題がある。グリーンは「重要性を持つ」ことの指標となる数的な判断基準は存在しないことを指摘している。20世紀前半のインフルエンザの流行（いわゆる「スペイン風邪」）や HIV での死者数はわずかだが、それらの病の引き起こした経済的・文化的インパクトはきわめて大きかったという指摘¹⁶⁵⁾は、「ユスティニアヌスのペスト」のインパクトを考える際にも想起すべきだろう。

第四に、「ユスティニアヌスのペスト」の影響をどのように評価するのかについて、主張が極端・過激なものになりやすい傾向がある。影響をかなり過大に評価しているハーパーの主張はその代表例であろうが、プロコピオスやエフェソスのヨハネスの伝える数字に一定の信憑性を想定するサリスの議論にも、同様の傾向を感じとることができる。一方でモーデカイとアイゼンバーグの主張も、「ユスティニアヌスのペスト」の影響を小さく評価することが所与の前提になっている側面が否定できない。2人は「ユスティニアヌスのペスト」の流行についてメディアで「現在のインフルエンザの流行とあまり変わらない (not unlike our flu outbreaks)」と発言しており¹⁶⁶⁾、「スペイン風邪」についてもその影響を小さく評価している¹⁶⁷⁾が、全体として感染症の流行が社会に及ぼす影響を小さく見積もっているように感じられる。また、主張が異なる人びとに対して「最大化主義者」といったレッテルを貼ることの危険性はサリスが指摘している通りであるが、一方でサリスの「修正主義者」という言説も、同様の批判は免れない。

第五に、マイヤーが強調するように、「ユスティニアヌスのペスト」が6世紀中盤以降の社会に心理的な影響を与えたことは認めていだろう。モーデカイとアイゼンバーグは社会の変化は6世紀中盤以前から続いていたものであるとして、マイヤーの議論に否定的であるが、マイヤー自身も6世紀前半以前からの変化のプロセスを踏まえた上で、「ユスティニアヌスのペスト」が与えた影響について議論をおこなっているのであり、モーデカイらの批判は的を射ていない。プロコピオスをはじめとして、同時代の文字史料でのペストに対する表現がモーデカイらの言うように誇張されたものであったとしても、それはペストが同時代の人びとに与えた心理的インパクトの大きさを示すものと解釈可能である。

すでに触れたように、「ユスティニアヌスのペスト」に関する研究は、現代社会（特に1980年代以降）におけるさまざまな感染症の流行の際に前例、あるいは比較の対象として意識されることも多い。そのため、「ユスティニアヌスのペスト」に関する研究は単に古代末期の地中海・中近東地域の歴史研究、そして「古代から中世へ」の変化をめぐる議論というにとどまらず、現代社会の理解のためにも有用な視点や議論をもたらしてくれるものである。それは新たな感染症のパンデミックと向き合っている2020年代の我々にとって無視できないものである。

165) M. H. Green, "When Numbers Don't Count", *EILODON*, November 19, 2019. (<https://eidolon.pub/when-numbers-dont-count-56a2b3c3d07>) (最終閲覧日：2022年11月18日)

166) M. Eisenberg, L. Mordechai, R. Alpert, "Why treating the coronavirus like the Black Death is so dangerous", *The Washington Post*, Feb. 6, 2020. URLは注118)参照。

167) Eisenberg & Mordechai (2022), p. 291.

分子遺伝学など、近年利用可能になった新たな研究手法やその成果をこれからも積極的にとり込みつつ、今後も「ユスティニアヌスのペスト」に関する議論は続く。そして、続けていかねばならない。

[本稿は、JSPS 科研費（JP22K00950）による研究成果である。]

(本学文学部教授)